

毎月兩度章（四帖十二通）

そもそも、毎月兩度の寄合の由来は、なにのためぞというに、さらに他のことにあらず、自身の往生極樂の信心獲得のためなるがゆえなり、しかれば、往古より今にいたるまでも、毎月の寄合ということは、いづくにもこれありといえども、さらに信心の沙汰とてはかつてもってこれなし、ことに近年は、いづくにも寄合のときは、ただ酒飯茶などばかりにて、みなみな退散せり、これは仏法の本意には、しかるべからざる次第なり、いかにも不信の面々は、一段の不信をもたて、信心の有無を沙汰すべきところに、なにの所詮もなく、退散せしむる奈しかるべからずおぼえはんべり、よくよく、思案をめぐらすべきことなり、所詮自今以後において

は・不信ふしんの面めん々めんはあいたがいに・信心しんじんの讚嘆さんたんあるべきこと肝要かんようなり、
それ、当流とうりゅうの安心あんじんのおもむきというは・あながちにわが身の罪障ざいしょう
のふかきによらず、ただもろもろの雜行ぞうぎょうのころをやめて、一心いっしんに
阿彌陀如来あみだにょらいに歸命きみんして、今度こんどの一大事いちだいじの後生ごしやう・たすけたまえ
と・ふかぐたのまん衆生しゆじやうをば、ことごとくたすけたまうべきこと・さら
に疑うたがひあるべからず、かくのごとくよくころえたる人ひとは・まことに
百即百生ひやくそくひやくしやうなるべきなり、このうえには、毎月まいがつの寄合きやうあいをいたしても、
報恩謝徳ほうおんしゃとくのためとこころえなば、これこそ眞実しんじつの信心しんじんを具足ぐそくせし
めたる行者ぎやうじゃとも・なづくべきものなり、
あなかしこ　あなかしこ

(不読)

明応七年二月二十五日これを書く

毎月二度講衆中へ 八十四歳

毎月二度章の大意

毎月二度の会合をするのはなんのためかといえ、自身が浄土に往生する、その信心を得るためです。ところが、その信心について話し合うことはまったくなくて、近ごろは飲み食いだけして帰っています。これは仏法の本意にかなっていません。信心を決定していない人々は疑問とするところを問いただして、信心の有無を話し合うべきなのに、なんの得るところもなく帰ってしまうのでは、会合した意味がありません。これからは、信心を決定していない人

々はお互いに信心について話し合うことが大切です。

そもそも浄土真宗の信心とは、いかに自分の罪が深くとも、自
力のはからいを捨て、二心なく阿弥陀如来に帰命し、後生をお
たすけくださいと如来におまかせすることです。その衆生を、如来
がことごとくお救いくださることは疑いありません。このように信心
のいわれをよく心得た人は百人が百人、みな往生できるのです。
その上で毎月会合しても、仏恩報謝のためと承知するならば、
それこそ眞実信心を得た行者といえましょう。